

瀬戸町から見てくる鉄砲について

岡山歴史研究会 丸谷憲二

1 はじめに

JR 瀬戸駅の裏山が鉄砲山であり、瀬戸町は鉄砲鍛冶と関係の深い場所である。しかし、瀬戸町の鉄砲についての調査報告は実施されていない。

2 鉄砲山の地名の由来

『瀬戸町歴史事典』には、『瀬戸駅の上にある標高 166.1m の山である。江戸時代、この山から東へ三谷山までは禁猟区で、山裾光明谷と、頂上に制札杭が建っていた。山の本来の名は「くらかけ山」であったが、「鉄砲杭」と呼ぶようになり、いつの間にか杭が省略されて鉄砲山になってしまった。』と説明している。しかし、地名学上ありえない説明である。岡山県内での鉄砲地名は他に 2 箇所ある。高梁市鉄砲町(てっぽうちょう)と津山市鉄砲町(てっぽうまち)である。津山市鉄砲町(てっぽうまち)の記録が正確であり、「砲術練習の射撃をした山」である。鉄砲山の地名成立は戦国時代と推定している。



鉄砲山から見える瀬戸町

2.1 高梁市鉄砲町(てっぽうちょう)

江戸期は鉄砲丁と書き、元和 3 年(1618 年)池田長幸が入国して足輕の居住区域とした。

2.2 津山市鉄砲町(てっぽうまち)

明治 17 年発刊の『津山誌』矢吹正則著に、「森氏が鉄砲組の足輕を当地に置いたことによる。大砲場があった。南方の大谷村石山に向かって砲術練習の射撃をした。当地には鉄砲師がいて修理から製造まで行った。ほかに鉄砲金具師・鉄砲台師もいた。」とある。

慶長 5 年(1600 年)関ヶ原の戦いの後、美作国は備前岡山藩主小早川秀秋の領有であった。慶長 7 年(1602 年)、秀秋の無嗣子での死去により廃絶となる。慶長 8 年(1603 年)、信濃川中島藩より森可成の子忠政が美作一国 18 万 6500 石にて入封し、津山藩が立藩した。翌慶長 9 年(1604 年)より美作の府庁として津山城の築城に着手し、元和 2 年(1616 年)に完成した。この間に津山の城下町も整備され、藩政の基礎が築かれた。

3 屋号「てっぼう」・岩藤家

『瀬戸町誌』に鉄砲鍛冶として、『岩藤栄家の家号は「てっぼう」といい、明治の始め頃まで、虎太とその子輝太が鉄砲を造っていた。』とある。岩藤栄家の末裔が岩藤龍右氏(瀬戸町江尻)である。岩藤家には鉄砲と散弾の玉を作る道具が残されている。火薬は火薬屋(赤松家)より購入していた。家号「てっぼう」とは、旧道に面しての手広い鉄砲の商いを意味している。屋号「てっぼう」と屋号「鉄砲屋」の違いを明確にしたい。



3.1 屋号「てっぼう」とは

備前長船は、『幕末には長船鍛冶の中でも「鉄砲屋の屋号」を持つ刀匠・祐信らによって火縄銃の一大産地として盛隆し、多くの備前筒が作られた』と備前長船刀剣博物館は説明している。鉄砲屋亀斎(鶴岡市)の鉄砲屋は屋号、亀斎が雅号である。屋の付く屋号は鉄砲鍛冶である。岩藤家は屋号「てっぼう」であり、屋が付いていない。本業は鉄砲の仕入れ販売である。

火薬屋赤松家を探していて、岡山市大福の屋号「てっぼう」の情報を入手した。お名前をお聞きしなかったが、実家の家号が「てっぼう」とのこと。「大阪へ材木納品の帰りに鉄砲を仕入れていた」との説明である。結婚して瀬戸町へこられた。掛谷忠義氏から「もしかして、もし、当人なら旧姓、吉崎香さん。大福、笹ヶ瀬川の旧港に近く水運を所有されていたのでは？」と推測します。私の同級生？かも」との情報を得ています。(※ 屋号 てっぼう 吉崎製材所 岡山市南区大福 721-1 吉崎寛氏)

3.2 岩藤家蔵の散弾の玉を作る道具



「散弾の玉を造る道具」である。「岡山県備前国岩藤虎太祐信作」と銘がある。これは玉型(溶けた鉛を凹み部分から流し込み、玉を成型する)である。14個の散弾の玉が製造される。玉は各自が自宅で製造していた。玉を作る道具としては、①鑄鍋(鉛を溶かす柄付きの鍋)と②鉛板(鉛を溶かして玉の材料とする)が必要である。江戸時代から猟師は散弾を使用していた。アメリカでは現在も自分で弾を作っている。自宅に散弾銃の弾を作る道具がある。

3.3 岩藤家蔵の火縄銃

全長 1305mm、口径 12mm、銘無しである。鉄砲鍛冶は長船で取得したと伝承されている。岡山藩の鉄砲関係扶持職人の最古の記録は、1674 年(延宝 2 年) 鉄砲師 2 名・台師 1 人・鉄砲薬師 1 人」である。『長船町史刀剣編通史』の長船鉄砲初見、江戸末期 1827 年(文政 10 年)は調査不足である。



3.3.1 備前筒の特徴

鉄製の外バネカラクリが最大の特徴である。丸い銃身。やや先細りの黒く着色された銃床に特徴がある。鉄の外バネを強くしている。



3.4 岩藤家蔵の鉄砲に関する道具

火縄銃を使用するには、玉を作る道具の他に、火に関する道具、火薬や玉を入れて持ち運ぶ道具が必要である。泰平が続いた江戸時代には、美術工芸品のような立派な漆塗の道具が使用されていた。松本城(長野県松本市丸の内 4-1)展示品と岩藤家蔵が類似している。松本城展示品と比較し、鋳鍋、鉛板、輪火縄が不足している。

- ① 火薬入(口薬＝線薬(クチクスリ)。火皿に注ぐ火薬。

口薬は火皿から銃筒内部の薬室に通ずる小さな穴(火門)を経て導火させる。粒子を細かくして用いる。

- ② 玉を入れる道具の烏口(玉を袋に入れ、くちばし状になった口から玉を1発ずつ取り出す)

烏口には、口を閉める蓋が付いている。 烏口が見えない。

- ③ もぐさ入れ(火種のもぐさを入れる)

- ④ 輪火縄には木綿・竹・桧などを使用。



① 火薬入(口薬用)



② 玉を入れる道具



③ もぐさ入



④ 輪火縄

4 火薬屋 赤松家



赤松家とは瀬戸町肩背(かたせ)の赤松家である。赤松家は山名氏と戦った守護赤松政則(当主在職:1458年(長禄2年)～1496年(明応5年))の末裔である。1441年(嘉吉元年)の嘉吉の乱で滅亡した赤松家を再興した中興の祖である。管領細川家に接近し中央政界での影響力を高め従三位まで登り詰めた。一方で赤松家の戦国大名化に努め、1代で赤松家の全盛期を築き上げた。

県道一日市瀬戸線に面した赤松家(肩背 1437)である。現在の当主の祖父の時代迄が火薬屋であった。「大阪よりの仕入れ販売」としか、情報をえることはできなかった。

4.1 肩背地区の火薬作り

『瀬戸町歴史事典』に、「農家には現在でも、挽臼や唐臼の石臼がある。これらは火薬作りに使用された道具である。」、中津山元興寺の「文久3年(1863年)のお触写しに、・・・寺社建物床下之土御入用ニ付・・・」と見え、火薬の原料である硝石の入手が床下の土にも及んでいた。明治になっても輸入硝石を入手できない百姓は、人糞や床下土を利用したのである。」と記録されている。

明治18年(1885年)の鉄砲所持者は、「江尻19人、大内17人、肩背21人とあり、中にはピストル銃を持った者が江尻に2人もいる」と記録されている。



5 保木城と明石掃部頭 「鉄砲衆四十人 八百石」

『備前軍記』に、「1483年(文明15年)12月、守護赤松政則に背いた松田元成の勢が吉岡の南の山に陣取り、播磨への通路を塞いでいる」とある。南の山の山城が保木城である。宇喜多氏の家臣であった明石行雄(景親)・守重(全登:たけのり)父子らが明石氏の居城として天文年間(1532～1554年)に創建された。

しかし、採石で城山自体が無くなってる。

明石全登はキリシタンである。洗礼名はジョアン・ジュスト、ジョアニー。三万三千百拾石。「鉄砲衆四十人 八百石」と『宇喜多秀家士帳』に記録されている。信仰心厚く、宣教師を領地に呼んで布教させた。キリシタン宣教師から、最新の鉄砲製造技術が伝授されたと推定される。掃部頭は役職名である。掃部寮(かもんりょう)は、律令制において宮内省に属する令外官。掃部寮は宮中行事に際して設営を行い、また殿中の清掃を行う。頭(かみ)は(従五位下相当)でトップである。

一 明石掃部頭	三万三千百拾石
此内壹万石 文三御加増	
千石 慶三加	
九千六百拾石慶三山之内加	
千石 無役 但三星城領	
一 鉄砲衆四十人	八百石
与力分	千八百石
自分	三万三千百拾石
都合	三万四千九百拾石 内
	千石 無役 明石四郎兵衛分 加
	千石 自分 無役分
ノ	三万二千九百拾石

『金沢の宇喜多家史料』

「慶長初年(1596年)宇喜多家士帳」



6 瀬戸町鍛冶屋と吉岡一文字派

瀬戸町鍛冶屋は鎌倉時代の吉岡一文字派刀匠の居住地である。吉岡一文字派は、福岡一文字派に次いで鎌倉時代末期から南北朝期にかけて繁栄した。「備前古刀年表」の一文字派は、1290年(正応3年)の

備前助吉～1363 年(貞治 2 年・正平 18 年)の備州吉岡住助秀が収録されている。他に助光・助茂・助次・助義が知られている。吉岡姓は数件あったが、現在はなくなっている。(5 月 28 日調査)

キリシタン宣教師から明石全登へ、最新の鉄砲製造技術が伝授され、鉄砲を製造した鉄砲鍛冶とは吉岡一文字派の刀匠であると考えたい。

6 まとめ

この報告が瀬戸町の鉄砲に関する初めての報告である。

- ① 保木城と明石掃部頭「鉄砲衆四十人 八百石」は天文年間(1532～1554 年)の記録である。
鉄砲山の地名成立は戦国時代である。
- ② 火薬屋赤松家の肩背地区には「黒色火薬原料の生産」に必要な条件が全てそろっていた。
木炭の樹種ヤナギ、古土法による硝石製造、鉛、亜鉛も長船町磯上油杉鉾山で採掘可能。
- ③ キリシタン宣教師から明石全登へ、最新の鉄砲製造技術が伝授されたと推定する。
鉄砲を製造したのは吉岡一文字派刀匠と推定したいが、169 年の差がある。
- ④ 屋号「てっぽう」から、岩藤家は鉄砲鍛冶と鉄砲商売を兼業していたことがわかる。
つまり、岩藤家蔵品は不足品ではなく、廃業時の売れ残り商品か、記念に残した商品である。
松本城展示品と岩藤家蔵品が類似している。お客様は獵師ではなく富裕層の武士と推定している。

⑤ 岩藤虎太祐信の鉄砲鍛冶の場所 瀬戸町笹岡

『全国鉄砲鍛冶銘 地域別分類 2001 年』に、備前笹岡、西山、太田、大富、岡山、金川、畠田、鹿瀬、中山、長船、阿知里、上野が記録されている。備前笹岡が「瀬戸町笹岡」である。長尾山の麓である。

- ⑥ 戦国時代の鉄砲が発見され「瀬戸町の鉄砲鍛冶」として纏められることを期待している。
しかし、鉄砲は消耗品であり鉄はリサイクルされ再利用されていた。戦国時代の鉄砲発見は困難であろう。(山元幹雄氏)

7 追記

岩藤龍右氏の奥様から、昭和 20～25 年頃、瀬戸南高校事務長の桐野稔氏から、「赤磐市町刈田の旧家道満誠氏宅に、岩藤虎太祐信銘の鉄砲がある。自分の名前を出して訪問し確認するように」と教示されたが、訪問していないとのこと。備前西山(赤磐市西中)の近くである。手紙に三木益次氏の名前もある。岩藤虎太祐信銘の信銘より、下記表の祐幸から推定し、備前住とは備前西山住となる。

『日本の鉄砲鍛冶』より抜粋 「備前国(備州) 岡山藩(備前藩)			
岩藤虎太祐信		備前住	
稲谷真左善	地鉄惣巻張	備前笹岡住	(岡山市東区瀬戸町笹岡)
大野嘉郎祐幸		備前西山住	(赤磐市西中)
大村嘉四郎祐幸		備前西山住	(赤磐市西中) (山元幹雄氏)

8 参考文献

- ① 『岡山県の地名 日本歴史地名体系 34』 1988 平凡社
- ② 『角川日本地名大辞典 33 岡山県』角川書店
- ③ 『改訂 瀬戸町の歴史散歩』平成 8 年 瀬戸町の文化財を語る会
- ④ 『瀬戸町歴史事典』平成 18 年 瀬戸町教育委員会

- ⑤ 『瀬戸町誌』昭和 60 年 瀬戸町誌編纂委員会 瀬戸町
- ⑥ 『長船町史 刀剣編資料』平成 10 年 長船町
- ⑦ 『長船町史 刀剣編図録』平成 10 年 長船町
- ⑧ 『日本の武器兵器』<http://blogs.yahoo.co.jp/japaneseweapons/58050348.html>
- ⑨ 「浦上・宇喜多両家記全」備作之史料(五)『金沢の宇喜多家史料』平成 8 年 備作之史料研究会
- ⑩ 『保木城に行ってみた』<http://okautan.exblog.jp/21189817/>
- ⑪ 『図説 日本武器集成』2006 年 学習研究社
- ⑫ 備前長船刀剣博物館 <http://www.city.setouchi.lg.jp/token/>
- ⑬ <http://www.日本の武器兵器.jp/>
- ⑭ 『日本の鉄砲鍛冶』二版 占部日出明 平成 20 年 香川県東かがわ市引田 1895-5
- ⑮ 『日本の古銃 総論編』澤田平 堺鉄砲研究会